

彼方のキリスト

新井 宏

一、幼児キリスト像

幼い頃、キリスト教の幼稚園に通っていた。それから、私の誕生日はクリスマス・イブである。ただ、それだけことなのに、キリスト教には郷愁がある。

そのひとつが、星に導かれて、東方の三博士が、ベツレヘムに至り、馬小屋でマリアに抱かれた神の子イエスに拝する話である。

おそらく幼稚園の頃、クリスマス会で聞いた話であるが、不思議なことに、その時にマリアに抱かれたキリスト像を見たような気がする。しかも、そのキリスト像は、あまり可愛くなかった。変なことを覚えているものである。

あるいは後年の記憶が入りまじっているのかも知れないが、最近になって、ルネッサンス期の聖母子像の絵画をいくつか見ても、いつも同じ印象を持つ。私の基準では、幼児は無条件に可愛くなければならぬのに、マリ

アに抱かれたキリスト像は可愛くないのである。

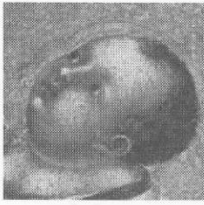
もちろん、可愛くないというのは言い過ぎで、賢い顔、聡明な顔とでも言えばよいのかも知れないが、幼児なのに大人の顔付きをしている違和感なのである。

キリストを崇める立場からは、単に可愛いキリスト像など描くわけには行かなかったのだと思うが、そんな理由なら、いくらでも「解説」があるはずである。

しかし、どうしたことであるうか、それらしい解説がなかなか見つからない。いや、それどころか、マリアに抱かれたキリストが「可愛くない」などと不遜なことを言っている人もいないようなのである。

自死直前の芥川龍之介でさえ、遺書代わりに「西方の人」―「統西方の人」を著し、愛していたに違いないクリストに感情移入し、「詩人ジャーナリスト」として奔放に描くが、幼児キリスト像については何も触れていない。

そうなると、私の認識が間違っているのか不安になる。そこで、ルネッサンス期などの有名な聖母子像のキリ



Lorenzetti



Giotto



Duccio



Botticelli



Francesca



Massaccio



Raffaello



Filippo Lippi



Weyden

スト像の部分、インターネットから任意にコピーして五十像ほど集めてみた。
有名な画家としては、十四世紀初のジョット、十五世紀のマザッチョ、フィリップ・リッピ、ロヒール・ファ

ン・デル・ウエイデン、ポッテチェリ、ラファエロなどを含んでいる。

その一部分を、ほぼ年代順に並べてみると、おそらく私の見解に同意して頂けると、もちろん、愛らしい天使のようなキリスト像も無いわけではないが、大部分が「可愛らしくない」のである。

そこで、勝手な推測をする。

キリスト教などの一神教は、性善説よりも性悪説に立脚している。幼児のあどけない「可愛らしさ」などを認めていては、性悪説になじまない。しかも、崇める対象は、神々しい叡智を示さなければならぬ。だからどうしても大人っぽい幼児像となり、無垢の愛らしさから遠ざかる。

そう言えば、聖徳太子の幼児像も、お地藏さんも「可愛らしい」とは言いがたい。

そこで思い出した、母がいつも言っていた。「宏が生まれた時に、ママママしい子だと言われたが、誰も可愛いと言ってくれなかった」と。「おびんずる様」のようだと言われたらしい。母にとってはかなりのショックだったようである。

ちなみに、インターネットで「おびんずる様」を調べると、原始仏教の神、「十六羅漢の筆頭で、博識で慈悲深く十善を尊重し、説法に優れ、白髪長眉の相があった」と出てくるが、その一方では、酒好きで、神通力を見せびらかしたり、説法では獅子吼のごとく、異論反論を許さなかった、等々とある。

まあ、満更でもないが、赤いエプロンを纏い、黒光りする顔は、やはり怪異で嬉しくない。母がショックを受けたのも無理が無い。

だから、散歩中などで、幼児連れの母親に会うと、「可愛いですね」と声をかけることにしている。もつとも、例外なく本当にみんな可愛いからであるが。

二、聖歌六八七番

母が歌っていた賛美歌らしいのをかすかに覚えている。私が幼稚園の頃のことであるから、母が二十代後半であろうか。曲は良く覚えているが、歌詞はときれときれで、おそろく次のようなものであった。

まもなく「蒲田」の流れのそばで
楽しく合いました「羊飼い」たちと
……
きれいな きれいな川の……

……
ああ なつかしや

ただ、耳でなじんでいただけで、意味など判るはずもなく、「蒲田」とか「羊飼い」などは後の知識で置き換えたものであろう。

その後、わが人生は、キリスト教とは無縁で、その歌が何なのか確かめる機会もなかったが、今はインターネットの世の中。何か判るかも知れないと「まもなくかまたの流れのそばに」と入れて見た。

出てきたのである。その曲と歌詞が。そしてびっくりした。

曲は、なんと替え歌で良く知られている「たぬきの○○○○」なのである。

たん たん たぬきの○○○○は
風もないのに ぶーらぶら
それを見ていた 親だぬき
おなかをかかえて わっはっは

どうして気がつかなかったのであろうか。曲は全く同じではないようだが、確かに良く似ている。私にとって、おそろく人生初めての曲、母が口ずさんでいた賛美歌のメロデーが「たぬきの○○○○」と同じだったとは何と

も驚き入った。

そして歌詞も次のように判明した。

まもなく彼方^{かなた}の流れのそばで

楽しく会いましょう また友達と

神さまのそばの

きれいな きれいな川で

みんなが集まる日の

ああ なつかしや

水晶より透き通る 流れのそばで

主を賛美しましょう みつかいたちと

神さまのそばの

きれいな きれいな川で

みんなが集まる日の

ああ なつかしや

かくして、「蒲田」ではなく「彼方」で、「羊飼いたち」

ではなく「御使いたち」であり、歌詞の順番もかなり間

違っていたことが判った。

更に、この曲は賛美歌ではなく、聖歌六八七番である

ことも知った。

しかも、「たぬきの〇〇〇〇」の原曲は、この「聖歌」

ではなく、「タバコヤの娘」(昭和十二年、作詞・園ひさし、作曲・鈴木静一)として大ヒットした「向こう横町の煙草屋の、可愛い看板娘……」だと言う。

鈴木静一作曲とあるから、聖歌六八七番ではない。曲の一部を借用したとあるが、著作権などに大らかな時代だったのであろうか。それにしても、うる覚えの「聖歌」と「タバコヤの娘」の差がわからない。

私の生まれた年に世に出た「タバコヤの娘」は、いまでも、家電量販店ビックカメラや、大阪のカメラのナニワ、アース製薬のアースゴキブリなどのCMソングの替え歌にも使用されている。また、アニメ「ギルガメッシュ」でも歌われていると言う。

母がこの「聖歌」を覚えたのは、おそらく若い頃の奉公先がクリスチャンの家庭だったからであろうかと思う。母の背中で聞いていたような記憶なのであるが、あるいは私がキリスト教の幼稚園に通っていた頃のことかも知れない。

インターネット検索はかくも身近である。旧友の名を入力してみると何か出てくる。昔の恋人でさえも、うまく行けば消息を知ることができる。

長子は父母と一緒に過ごした頃のこととは良く覚えていますが、父母の幼児期や青春期のことを知らない。末子に

なると、何か昔話として聞いたようであるが、その点で意外に良く聞いて知っているのは孫の世代である。

わが娘から母のことを聞いて、知ったこともいくつもある。若い頃の奉公先の話も、娘から聞いたのかも知れない。

三、六段の調とグレゴリオ聖歌

「聖歌」といえば、近世筆曲の祖である八橋検校(一六一四〜八五年)が作曲した「六段の調」が、グレゴリオ聖歌「クレド一番」に良く似ているという。日本伝統音楽には珍しく「歌詞のない」純楽器的な演奏で、「主題と五つの変奏曲」とでも呼ぶべき形式で構成され、十六世紀スペイン風と呼ばば「六つのディフェレンシアス」すなわち「六段」だというのである。

このことに最初に気づいたのは、伝統音楽研究者の田辺尚雄氏らしいが、中世・ルネサンス音楽研究の第一人者、皆川達夫氏がこれを「題名の無い音楽会」で紹介してから、多くの人々に知られるようになった。皆川氏は、我が小山台高校の先輩である。

もちろん、類似性については異論もあるが、八橋検校の活躍した福島県の平市には、バテレンの教会があったと言うので、時代背景としては、あり得たと思う。

隠れキリシタンの伝えた「オラシヨ」の例もある。

元々はラテン語で祈祷文を指すオラシオ(Oratio)が、その発音通りに残っていた。

「まんじ」の同人の鍋屋次郎氏も、元治元年(一八六五)、大浦天主堂アティジャン神父の伝える感動的な手紙を、「口のみの伝承二百五十年の奇跡」『史遊会通信』二一八号で紹介している。

親愛なる教区長様、心からお喜び下さい。……昨日十二時半ころ、大人や子ども男女併せて十数名の二団が、単なる好奇心からとは思われない様子で天主堂の前に立っていました。天主堂の門は閉まっていたので、私は急いで開けに行きましたが、私が祭壇の方に進むにつれて、それに合わせるようにこの参観者たちも私に付きまわりました。……私が少し祈った後でしたが、四十ないし五十歳の婦人が私のすぐ傍にきて『ワタシノムネアナタノムネ ト オナジ』と、小さな声で囁いたのです。……本当ですか？ しかし、あなたたちは、どこからおいでになりましたか？ と私は尋ねました。私たちは、みな浦上の者でございます。浦上では、殆ど全部の人が、私たちとおなじ心を持っております。それからこの人は、すぐ私に聞きました。「サンタマリア ノ ゴソウ ハ ドコ?」、なんとこの人たちは「サンタ・マリア」と言っているのです。……私はもう、少しも疑いませんでした。私は今、長い間待ち焦がれていたあの日本のキリシタンの子孫を目の前にしているのです。……

「そうだ、本当にサンタ・マリア様だよ！ ご覧よ、ほれ、御子ジェズ様を御腕に抱いていらっしやる」

二百五十年の時を超えて今、目の前で親しみを込めてサンタ・マリアと御子イエズスの御名を正しく口にして

四、『沈黙』と『西方の人』

十五年前に、『まんじ』に参加して、初めて書いたのが「日本近代化の恩人シドッチ」である。

宝永五年（一七〇八）、屋久島の唐ノ浦に、年の頃四十歳、六尺豊かな色白鼻高の異国人が、武士風にさかやきを刺り、羽織袴に二尺四寸余の日本刀を帯びて上陸した。ローマ教皇から派遣されたシチリヤ島パレルモ生れのシドッチである。

シドッチ……その名を知る人は必ずしも多くない。現在の高校日本史の教科書を見ても、約半数がシドッチの名前さえ載せていない。屋久島の観光案内書にも、またシチリヤ島の観光案内書にも、その名を見ない。明らかにキリスト教の殉教者でありながら、ローマ法王庁から聖人として遇されてもいない。

しかし、シドッチが日本の近代化に与えた影響の大きさについては、もっともっと注目しても良いであろう。長い鎖国の状態にあった日本が、中国や朝鮮に比べて、

いち早く近代化を達成できたのはなぜか。

それは宣教師シドッチが殉教も怖れず日本に来て、新井白石をして、『西洋紀聞』や『采覧異言』を書かせしめ、それが徳川吉宗の「番書の禁の緩和」をもたらし、やがて杉田玄白などの蘭学の隆盛を生み、幕末に至って、大島高任らが独力で高炉を完成する潜在能力をもたらしたのである。そんなことを、『まんじ』のデビュー作で書いた。

ところで、そのシドッチに先立つこと、六十有余年、島原の乱が収束して間もないころ、シドッチと同じくシチリア島パレルモ生まれの宣教師キアラが、師であり高名な神学者であるフェレイラの棄教を信じられずに、日本に潜入してきた。このキアラを主人公としたのが遠藤周作の『沈黙』である。

神の栄光に満ちた殉教を期待して牢につながれたロドリゴ（キアラ）が聞いたのは、拷問され続けている信者のうめき声であった。すでに棄教を誓っているのにロドリゴが棄教しない限り許されないとフェレイラは言う。ロドリゴはひたすら神に祈るが、神は「沈黙」を通すのみ。究極のジレンマを突きつけられたロドリゴは、フェレイラが棄教したのと同じ理由で、ついに踏絵を踏む。

『沈黙』は、戦後日本文学の代表作であるばかりでなく、

キリスト教文学としても高く評価されているという。シドッチを追いかけていた頃、長与善郎の「青銅の基督」と共に『沈黙』を読み、遠藤周作に圧倒された。韓国の国立慶尚大学に居たころ、親しくなった日本語学科の金女史の卒論研究が「沈黙」であったことで、共に語った記憶も懐かしい。

そう言えは、昔、芥川龍之介の「侏儒の言葉・西方の人」を読み、ただただその「才能」に呆れていた。いま再び読み、『続西方の人』が自死の直前の遺書であったことを知った。

芥川龍之介は、明治二十五年（一八九二）年、東京市京橋区入船町八丁目で誕生した。父の新原敏三は、外国人の多く住むその地で、耕牧舎を経営し、牛乳、バター、チーズなどを製造・販売していた。ちなみに耕牧舎は、渋沢栄一が箱根仙石原に乳牛牧場を作ったのが始まりという。

龍之介は出生直後、父四十三歳、母二十三歳で、共に厄年という「大厄」のため、家の筋向いの教会の門前にいったん捨てられ、父の友人に拾われる。しかも生後七ヶ月の時に母が精神の異常をきたし、母の実家の芥川家に引き取られている。だから、この教会についての記憶などないはずなのに、古びた煉瓦の壁や、やさしい歌声、薄暗い部屋のつきあたりには黒い髪の女の大きな額などを覚えているという。

そのことが、龍之介のキリスト教への関心と無関係ではないであろう。幼児体験とはそんなものだと思ふ。

彼の超短編小説に「じゅりあの・吉助」がある。

浦上村の出身の愚鈍な吉助は、主人の一人娘、兼に懸想したが、かなわぬ恋のため、出奔してキリシタンとなり、舞い戻って、結婚して幸せに暮らしている兼に對して、飼犬よりもさらに忠実に仕えていた。

しかし、挙動に不審なところがあり訴えられ、奉行所の尋問に「えす・きりすと様、さんた・まりあ様に恋をなされ焦れ死に果てさせ給うた」と述べている。

キリストの母サンタ・マリアをキリストの恋人に描くところに、龍之介の生母への想いがあるように思う。

その終句で、龍之介は吉助を「日本の殉教者中、最も私の愛している、神聖な愚人」と言う。